

要求水準の一般性に関する一実験的研究

特にGDスコアの一般性について

富 安 芳 和

I 問題の所在

目標設定行動に関係した人格特徴を研究するのに要求水準の実験場面が有用であることが、古くから、多くの研究者によって指摘され、実験的に観察された要求水準の測定値と他の独立なパーソナリティ測定値との間の関係に多くの関心が示されて来た。しかし、これらの研究には一致が必ずしも認められていない。こうした不一致の主たる原因の一つは、任意の(一つの)要求水準の実験事態で観察された要求水準の測定値を以って個人の要求水準設定行動の指標としているところにあると考えられる。ここに、一般性の問題が要求水準研究の欠くべからざる重要な研究課題として浮び上って来る。

一般性の研究は、或る実験事態で観察された要求水準行動が果して他の事態に於いても妥当するかどうかということの問題とする。

要求水準の一般性に関する研究は多く報告されているが、それらの中には要求水準の一般性が客観的物理的な事態の類似性に依存するという主張を支持するものもあるし、要求水準は個人に恒常な一般的諸特性に決定され、それが観察された事態には無関係だという主張を支持するものもある。

こうした研究者達の主張の不一致の主たる原因は、研究のために用いられた二つ以上の実験事態の類似性のおさえ方にあると考えられる。これらの研究に於いて実験事態が類似しているか異っているかの決め手は研究者の判断に委ねられていた。ところが、要求水準の設定に何らかの意味をもつであろうものは、客観的物理的な実験事態そのものではなくて要求水準を設定する個人によって知覚された事態であろう。従って、事態の類似性は、研究者の判断によってではなくて、要求水準を設定する個人の判断に基づいて決められるべきものであろう。要求水準の一般性が個人によって受け取られた事態との関係に於いて研究されるならば、諸研究にみられた主張の不一致を統一理解する道もひらけるであろう。

要求水準がそれを設定する個人の心理的事態に依存するとすれば、要求水準の一般性は個人の心理的事態の類似性に依存するはずである。即ち、個人によって受け取られた二つの事態が類似している場合には、異ってい

る場合よりも、要求水準の一般性は高いであろうと考えられる。これを吟味するための一つの試みとして計画されたのが本研究である。

これを吟味するためには、個人と個人に呈示された実験事態とを同時に取り扱わねばならない。そのために、二つの実験仮設に分けて検討することが必要となった。それらは、(1)二つの事態を一定にした場合に、それらを類似したものとして受け取っている個人の方が、異ったものとして受け取っている個人よりも、二つの事態での要求水準の一般性は高いであろう。(2)個人を一定にした場合に、個人が類似したものとして受け取っている二事態の方が異ったものとして受け取っている二事態よりも、要求水準の一般性が高いであろう、というものである。

本研究では、要求水準の測定値としてGDスコアを採用し、一般性の指標として相関係数を用いることにする。また、要求水準を聴き出すための質問も、“この次には少なくともどれだけやりたいか?”というものに限ることとする。

実験仮説(1)の吟味のために計画されたのが実験Iであり、実験仮説(2)の吟味のために計画されたのが実験IIである。

II 実験 I

〔手続〕

課題：1 試行5題から成る計算問題10試行を以って第1課題とし、1 試行3題から成る応用問題10試行を以って第2課題とする。両課題ともテストとして与えられる。

被験者：事態の受け取られ方が類似しているか異っているかを二つの課題領域に於ける被験者の成功失敗に関する過去経験(教師の評価)と現在の自信あるいは成績の良さに関する被験者自身のみ方が類似しているかいないかによっておさえ、二つの課題遂行の事態の受け取り方が類似している個人群としてB群を、受け取り方が異っている群としてU群を小学校5、6年生209名の中から選択し構成した。

B群……(a)教師の評定で両課題領域の成績のバランスがとれていて成績も良い方であるとされ、(b)自身でも自

信あるいは成績の良さに関して、少なくとも一方で、バランスがとれているとした児童33名。

U群……(a)教師が計算問題の成績は良いが、どうも応用問題の成績が悪いとし、(b)自身も計算問題の方が自信もあるし成績も良いとした児童32名。

成績の報告法：成績は試行毎に要した時間と正答数とから算出され、0点から100点まで得る可能性があると考えられたが、実際には、全被験者共通に、“あらかじめ決められた得点”に従って与えられた。それらは、第1課題で試行順に、63, 63, 65, 67, 65, 67, 68, 70, 72, 75点であり、第2課題では、それらより3点少ない。

実験は個人でなされ、初めに第1課題が、次に第2課題が与えられた。要求水準は第2試行から設定された。

〔結果〕

目的に沿った結果の分析は、第3試行から第10試行までの平均GDスコアと試行毎のGDスコアについてなされた。平均GDスコアと第2試行のGDスコアの課題間の相関は、Table 1に示される通りである。

これらの結果は実験仮説(1)を支持しており、第3試行から第10試行までの試行毎のGDスコアの相関についても、これと一致した傾向が認められた。

Table 1 第1課題と第2課題との間のGDスコアの相関

	B 群		U 群		群差の有意水準 (Pの値)
	相関係数	有意水準(P)	相関係数	有意水準(P)	
平均GDスコア	.908	<.001	.746	<.001	<.05
第2試行のGDスコア	.760	<.001	.348	ns	<.05

III 実験II

〔手続〕

被験者：小学校6年生64名。

課題：予備調査により困難度を統制された三筆書きの記号記入問題、各課題1試行20個の記入から成り10試行。

実験事態の構成：実験事態は、検査(T)―練習(R)条件と成功(S)―失敗(F)条件の操作によって構成され、検査条件は極度に被験者を緊張させるように、練習条件は極度に被験者を気軽にさせるように工夫された。成功条件は実施者による成功評価を以って被験者に自信をもたせるように、失敗条件は実施者の失敗評価を以って被験者に自信をもたせないように工夫された事態構成の条件である。二条件の組み合わせによって四事態が構成され、各事態に二個の課題が当てられた。実験の施行順序は、TS₁, RF₁, TS₂, RF₂, TF₂, RS₂, TF₁, RS₁の順序である。各課題とも、成功―失敗条件は第5試行終了後に挿入された。

事態の受け取り方の測定：(1)練習事態での課題が終了した後に、その前に施された検査事態との比較に於いて、緊張―気軽、自信有り―自信無し of 二次元での内観報告、(2)実験の全過程終了後に与えられた、全課題を二次元に沿って分けるための質問についての被験者の内観報告が事態の受け取り方の測定のために用いられた。

成績の報告法：作業制限法のかたちをとったが、実際

には、全被験者に共通に“あらかじめ決められた得点”に従って与えられた。それは、最も成績の高い課題で試行順に、35, 34, 33, 33, 34, 32, 33, 32, 32, 31秒であり、他の7課題では1秒ずつ低くなっている。

実験は個人実施。

〔結果〕

結果は実験の全過程を終了した53名について整理された。事態の受け取り方の測定(2)が失敗に終り、(1)のみに限っても、四つの比較対を通して検査事態の方が緊張し、成功事態の方が自信があったものは、53名中7名のみであった。従って、所期の目的に沿った整理は不可能となった。二つの検査失敗事態と二つの練習成功事態の組み合わせ(TF₁, RS₁, TF₂, RS₂)についてのみ結果の検討が可能であり、これら二つの比較対に於いて抽出された分析対象は33名であった。

その結果はTable 2に示される通りである。二つの検査失敗事態での課題間の相関と、検査失敗事態の課題と練習成功事態の課題との間の相関との比較に於いては、実験仮説(2)を支持する傾向が認められるが、後者と練習成功事態での課題間の相関との間には、仮説とは逆の傾向が認められた。

更に、検査失敗事態での二課題でのGDスコア間の相関の方が、練習成功事態での二課題間のGDスコアの相関より高いことも見出された。

検査成功事態と練習失敗事態との比較に於いて緊張し

Table 2 GDスコアの相関の差の検討

測定値	検討種 相関 対 差	実験仮説の吟味				$r_{TF \cdot TF}$ と $r_{RS \cdot RS}$ の比較	
		$r_{TF \cdot TF} >$ $r_{TF \cdot RS}$	$r_{TF \cdot TF} <$ $r_{TF \cdot RS}$	$r_{RS \cdot RS} >$ $r_{RS \cdot TF}$	$r_{RS \cdot RS} <$ $r_{RS \cdot TF}$	$r_{TF \cdot TF} >$ $r_{RS \cdot RS}$	$r_{TF \cdot TF} <$ $r_{RS \cdot RS}$
		4		4		1	
		有意(傾向)	有意(傾向)	有意(傾向)	有意(傾向)	有意(傾向)	有意(傾向)
平均GDスコア		2 (2)			2 (2)	1	
試行毎のGDスコア							
第6試行		1 (2)	(1)	(1)	1 (2)	(1)	
第7試行		(1)	(3)	(1)	1 (2)	(1)	
第8試行		1 (3)			(4)	(1)	
第9試行		(3)			3 (1)	1	
第10試行		1 (3)		(3)	(1)	(1)	

た事態として検査事態を挙げているもの30名について、同様の分析が試みられた結果、これと一致した傾向が認められた。

IV 総括

①実験仮説(1)は本研究の条件下で支持された。②実験仮説(2)は支持されたとはいえない。③気軽な事態でのGDスコアの一般性の方が、緊張する事態での一般性よりも低いことが見出された。しかし、このことから、仮説の修正や棄却を急ぐべきではない。

これらの事柄は、少なくとも、要求水準が客観的物理

的事態に依存するという主張も、物理的事態を越えて要求水準が恒常であるという主張も支持していない。益々、個人と事態との関連の中で要求水準が論じられるべきだという本研究の立場の重要性を認識させるものであると考えられる。

残された問題として、①受け取られた事態の類似性の測定を正確ならしめる工夫、②実験事態の標本をふやして仮説の再吟味を行なうこと、等が大きな問題として挙げられる。